

小特集＝ジャン＝リュック・ナンシーにおける芸術の問い

はじめに

西山雄二

(東京都立大学)

本小特集では、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの芸術論関連のテクストを二編収録している。

まず、「さまざまな形への欲望」は、カナダの文学研究者ジネット・ミショーとの対談で、「ヨーロッパ」誌の第960号（2009年4月）に掲載されたものである。ナンシーが企画したりヨン美術館での展覧会「素描への快樂」をめぐる質問から、当時刊行されたばかりの著作『民主主義の実相』をめぐる、芸術と政治に関する議論が展開される。ナンシーの思想においては、フランス語の名詞sensの多義性が活かされ、「意味」「感覚」「方向」といった含意で用いられる。sensは狭義の感性に収まらず、理念的な領域をも射程に入れているため、ミショーはナンシーにおける「アイステーシスの経験の重要性」を唱える。ナンシー自身はこの呼称に同意するものの、政治と芸術の領域を峻別する点でミショーに反論する。「すべては政治的である」といった表現のもとで拡散したかみえる政治の領域を、ナンシーは「集団、団体の管理運営を担う領域」として明確化する。他方で、諸芸術の領域は意味一般の本質的な多様性が生み出される場として、政治から分離され、政治によってその可能性が守られなければならないのだ。対談では、芸術だけでなく愛や思考なども例示され、意味を生み出すさまざまな形への欲望の重要性が説かれる。

つぎに、「陰翳の戯れ」は「ポエジー」誌の第111号（2005年1月）に掲載された小論である。光と闇の二元論は、ユダヤ-キリスト教的な神の創造の源泉として、プラトンの洞窟と太陽の比喩における真理論の骨子として、西欧の伝統的思考において幅をきかせてきた。ナンシーは光／闇の対とは異なる「陰翳」に着目することで、伝統的な真理論のシルエットを浮き彫りにし、その輪郭を自在に変奏させる。

光と対立するのではなく、光を前提とする陰翳は、諸事物の表面で異なる明暗や色彩を放つ光の戯れである。光が絶対的なもの、無条件なものに関わるとすれば、陰翳はむしろ相対的なものを表現する。ただこうした対比は絶対的な光に対する陰翳の劣位を示すわけではない。陰翳は絶対的な速度たる光が不動の諸事物の表面に接触することで生じるが、その点で、相対的なものこそがある関係のうちで絶対的に存在しているのである。このように、陰翳をめぐるナンシーの叙述は光／闇をめぐる真理論の幽かな薄明を照らし出すのである。

テキストの翻訳と収録にあたっては、伊藤潤一郎氏に仲介の労をとっていただいた。また、ジャン＝リュック・ナンシー氏とジネット・ミショー氏には翻訳を快く許可していただいた。各氏の御協力に深く感謝申し上げる次第である。